



はとがいたろう
全国学校飼育動物研究会会長
鳩貝太郎さんに聞く

潮流

心が育つ 動物飼育を

鳥インフルエンザや休業日の対応などで
小学校での動物飼育がピンチだ。
一方で、地域の獣医師会と連携して、学校
での動物飼育を工夫する例も広がっている。

飼育動物を介在した教育に科学の視点を

全国学校飼育動物研究会は、幼稚園・保育園や小学校などでの動物飼育や動物介在教育が子どもの成長に与える影響について考え、保護者や地域の獣医師会を交えた飼育支援のネットワークの在り方について検討し、動物飼育の重要性やその効果、課題の解決策などを科学的な視点で研究しようと、2004（平成16）年に設立された。学校での動物飼育は、大正時代に始まったとされており、子どもたちが自身が飼育委員会で動物飼育に主体的に関わっているのは、日本だけの学校文化となっている。ところが、鳥インフルエンザの発生への過剰な反応や、児童だけで長期休業中も飼育活動をするなどの困難性、教員の働き方改革の観点からの負担軽減などを背景に、特にニワトリやウサギなどの鳥類や哺乳類の飼育が減少傾向にあるという。

鳩貝 昨年の研究大会で、大手前大学の中山由佳先生が、小学校における鳥インフルエンザ後の動物飼育状況についての全国調査結果を報告しました。これは、2017～2018年調査による全国2062の小学校の現状と1都5県の大学生671人に、小学生のころ（2003～

2012年)の学校での動物飼育の有無や飼育動物種をたずねて、現状と比較したものです。それによると、屋内外での動物飼育をしている小学校は93・4%から85・8%に減少し、動物種では鳥・哺乳類が86・4%から49・1%に大きく減少しています。

ニワトリなどの飼育の減少は鳥インフルエンザ流行の影響の可能性があるほか、ウサギやモルモットなどの哺乳類の飼育まで減っているのは、飼育における困難さの影響も否定できないという。屋外飼育の困難さの理由では、病気やけがの処置と感染症やアレルギーへの対応が増大している。また2004年調査では「児童が当番で世話」が82・0%と大多数だったが、2017、2018年では17・9%に大きく減少し、「教職員が当番で世話」が57・0%と教員の負担が多く増えている現状があった。

鳩貝 一方で、中島先生らは、学校での動物飼育が子どもの発達に与える影響についても研究されています。小学校4年生を対象に飼育開始前から飼育終了半年後までの学年飼育での子どもの変化を追うと、学校適応や学校での対人関係(他者への共感性、向社会的行動や友だちへの思いやりなど)の発達に、動物飼育の効

果が大きいことが確認できました。また、全国の獣医師会など動物飼育の専門家の協力を得て、学校動物飼育を支える仕組みの検討や、効果をもたらす飼育の頻度や期間などについても検討していく必要があります。

教材としての活用などに課題も

継続的な学校での動物飼育の仕組みづくりは大切だが、学校として動物飼育をどう位置付けるかも重要な視点になっている。学校で小動物を飼育するためには学校の教育計画の中にきちんと位置付けることが大切で、具体的には各教科、領域での教材としての役割・位置づけを明確にして年間指導計画の中に位置づける必要がある。

鳩貝 例えば、動物の飼育活動を特別教育活動の中に位置づけるのであれば、学級活動、児童会活動、クラブ活動として小動物を1年間継続飼育することになるでしょう。また、その動物飼育は総合的な学習の時間や道徳の授業でも教材として活用できます。各教科や総合、道徳などとの関連を図ることは大切なことです。理科や生活科であれば小動物だけでなく昆虫を含む節足動物やメダカなどの魚類など多様な動物の飼育も教材として扱

えます。生活科では「(7)動物飼育、植物栽培の活動」として一定期間の動物飼育を指導することになっているので低学年の児童に適切な小動物を飼育させることになります。子どもたちは初めての動物飼育体験になるのでこの単元の指導期間中だけでもきちんと継続飼育体験をさせる必要があります。ですから期間限定の動物飼育、動物園などからモルモットなどを借りての飼育活動も有効な方法だと思います。このように動物飼育は教材としての位置づけとの関係を考慮し、動物の種類の選定や年間の継続飼育なのか短期間の飼育なのかなどを決めることが大切です。土日や長期休業中の飼育は保護者や地域の皆さんの協力を得て教員の負担が軽減できるような学校経営が求められると思います。

学校での動物飼育は飼育委員会の活動が多いが、先の調査で紹介したような「学年飼育」方式や教室飼育など、いろいろな方法がある。委員会活動では、一部の動物好きの子どもだけの活動になりやすいが、学年飼育方式だと、例えば4年生全員が当番を決めて、学校の飼育動物のお世話をして、1年間の取組で経験したことを、次の4年生になる子どもたちに引き継ぎをする集会

を実施している学校もある。飼育しているニワトリやウサギの名前や性格、好きな食べ物などを伝えたり、病気になるように、どう注意しているかを伝えている。

鳩貝 教室飼育でモルモットを育てていくことで、学級づくりに活かしている先生もいます。毎週、土曜日と日曜日は当番を決めてモルモットをケージに入れ、家を持って帰ってお世話をすることもあり、「小さな命を預かる」ことから愛着心や責任感が育ちます。さらには世話をすることとで観察眼が鋭くなり、モルモットの様子を絵日記にする際に、だんだんと細かい点まで見事に描写するようになります。

学校獣医師の制度の拡充を

日本の学校文化の一つであり、また教育効果もある動物飼育だが、ニワトリやウサギなどの飼育が減少している要因の一つにもなっている教員の負担感やアレルギー対策などへの対応も必要になってくる。特に飼育担当の教員自身が、動物飼育の経験がないことや、動物に対する知識不足、更には病気になる時の治療費などの予算確保などの制約も大きな課題である。

鳩貝 私たちの研究会は設立当初から地域の獣医師さんたちと連携していたこと

もあり、学校での劣悪な飼育環境を見かねて、学校を訪問して先生や子どもたちに飼育の仕方や病気などへの対応などを伝えるようにしています。地域によっては獣医師会と自治体・教育委員会とが連携して巡回指導や治療費の補助などを行政としてバックアップしているところもあります。病気で亡くなったウサギを診察して、死んだ原因を子どもたちにもきちんと説明してどんなに可愛がっても避けられない死があるということに納得してもらい、これからの飼育に活かすようにしてもらうこともできます。県によっては「学校獣医師」を認定したり、獣医師会が教員研修の講師になって、飼育方法や心の教育への支援をしているところも増えてきました。学校保健法では学校医、学校歯科医、学校薬剤師を必置する規定がありますが、ここに「学校獣医師を置くことができる」と追加されると、学校での適切な動物飼育が推進され教育面での活用もより広がるのではないのでしょうか。最近では、愛知県獣医師会の編著で『わかる！学校どうぶつ飼育ハンドブック』が中日新聞社から出版されており、飼育担当教員のために、飼育マニュアルや健康チェックポイント、飼育舎や

食餌のやり方、獣医師が参加するふれ合い教室などを紹介しています。

全国学校飼育動物研究会では、研究会誌「動物飼育と教育」を毎年発刊し、研究会の内容や研究論文を掲載するとともに研究会のホームページに掲載している。先に紹介した「小学校における鳥インフルエンザ後の動物飼育状況／全国調査結果」などの研究論文のほか、学校での動物飼育の報告なども掲載している。

鳩貝 学校での動物飼育は、いろいろなパターンがあつてよいと思います。例えば、校長先生の中には、不登校気味の子どもが教室には行けなくても、校長室や相談室などに行きやすいように、小動物や金魚、昆虫など、その子どもが責任を持って世話をする仕事を任せている方がいます。ホームページでは動物飼育の実践事例や研修会の内容などを紹介して先生方のお役に立てるようにしたいと考えています。コロナの問題などで先生も子どもたちもストレスがたまりがちな現状で、コンパニオン・アニマルとしての動物介在の教育に関心のある方は、広く、参考にしていただければと願っています。

全国学校飼育動物研究会 ≡ <http://www.schoolanimals.jp/>